平成 30 年５月 31 日
資料５

武蔵野市エコプラザ（仮称）検討市民会議（第 11 回）　議事要録

日　　時　平成 30 年 4 月 24 日（火）19：00～21：00
場　　所　武蔵野市役所 412 会議室
出 席 者　委員 13 名、事務局５名
小澤（紀）委員長、鈴木（雅）副委員長、大沢委員、大谷委員、
小澤（里）委員、上吉川委員、佐久間委員、志賀委員、塩澤委員、
鈴木（圭）委員、田中委員、村井委員、木村浩委員
議 事 等　１　新委員挨拶
２　今後のスケジュール、会議の進め方について
３　環境フェスタ、エコマルシェブース出展、環境講演会実施に伴うアンケート結果について
４　これまでの議論の振り返り
５　エコプラザ（仮称）の機能、空間活用について
６　その他

１　新委員挨拶

発言者	要旨
委員	10 年間新クリーンセンターの建設を担当しており、平成 22 年３月から新武蔵野クリーンセンター（仮称）施設・周辺整備協議会（以下「周辺整備協議会」という。）の中でエコプラザの議論に関わってきた。周辺整備協議会では、平成 29 年２月にエコプラザの中間のまとめを行い、議論の場をこの検討市民会議に移した。その後の議論経過については理解している。 これからエコプラザの機能、空間の具体的な議論を進めていくが、皆様の活発な議論に委員として参加したいと思う。

２　今後のスケジュール、会議の進め方について

発言者	要旨
事務局	資料１のとおり、工事の期間を考慮すると、８月に市民会議の検討のまとめや市の基本的な考え方を作成し、９月にはパブリックコメントを実施しないといけないことがわかった。その影響で、８月は２回会議を開催することになる。10 月以降は、市の設計案や運営管理の方針案等について、ご意見をいただきたいと考えている。 次回の第 12 回と第 14 回の会議については、グループワーク形式で議論する機会を設けたい。次回は、模型を使って空間についてご議論いただく。
委員	９月のパブリックコメントは、検討のまとめではなく、市の基本的な考え方

	の案が載るのか。
事務局	市民会議のまとめを資料として添付し、それを受けてこのような市の基本的な考え方となっているという見せ方で、パブリックコメントを募集しようと考えている。
委員長	この会議での意見を踏まえて、市の基本的な考え方が作成される。 市民や団体の代表など、各委員がそれぞれの立場で出席していると思うので、ご友人からも、ぜひパブリックコメントに意見を寄せていただければありがたい。
委員	６、７月の機能と空間の話と並行して設計が進むと思われるが、エコプラザだけでなく、管理棟や周辺整備についても次回話が聞けるのか。
委員	設計については、この会議である程度議論した後で行う。まずは、どういう空間と機能か、どのような使い勝手になるかを議論していただきたい。 次回はエコプラザの模型もお見せしたいと思っている。エコプラザだけでなく、東側の芝生広場や新管理棟、見学者コース、コミュニティスペース等があり、工場見学にデッキ伝いで行けるようになっているので、そこも含めてお見せする。
委員長	エコプラザとクリーンセンターとの視覚的なつながりについても、意見をお願いしたい。エコプラザについては、ごみだけでなく、環境という広い視点で検討している。５月には具体的なイメージや方向性を固めたい。

３　環境フェスタ、エコマルシェブース出展、環境講演会「地球温暖化と私たちの未来」実施に伴うアンケート結果について

発言者	要旨
事務局	環境フェスタでは284名の方にアンケートにご協力いただいた。資料２の１-③の集計結果のとおり、エコプラザ（仮称）のことを知っていた方は89名、知らなかった方は191名、知っていた方のうち53名の方が市報で、５名の方が一昨年の「ワークショップに参加して」と答えている。エコプラザ（仮称）の機能の要望については、「学習・体験の場の提供」が最も多く、クロス集計から、小学生と30代、40代の子育て世代が多く選択していることがわかる。 １-④の自由意見からは、エコプラザ（仮称）への要望として「子どもが興味を持てる場」、「環境のつながりを体系的に学べる場」、「参加型施設、交流・発信の場」という声が挙げられている。改善すべき点として、エコプラザ（仮称）について広報・宣伝をもっと行うべきだという声が複数挙げられており、今後情報の伝達に努めていきたい。 エコマルシェでは168名の方にご協力いただいた。自由意見の、「環境のことで気になっていること」については、井の頭弁天池の湧水復活等の身近な話題

	からアメリカの動向まで、非常に幅広いご意見をいただいた。「ブースの感想」では、「エコチェックシートで自分の暮らしを振り返れた」「改めて環境のことを意識した」等の意見が多く見られ、また、「身の回りのできることから環境に良いことを始める」といった、実際の行動へとつながる意見もあった。 環境講演会では、参加者 84 名のうち 77 名の方にアンケートにご回答いただいた。中高生が６名、大学生が１名と数は少ないが、若い人が地球温暖化という難しい問題に関心を持って参加いただいたことは、とても嬉しく思う。自由意見のエコプラザ（仮称）への意見を見ると、「子どもに教育できる施設」、「体験コーナー」、「子どもが意欲的に学べる」といった子どもを切り口とした意見が多く、「親子」、「子ども連れ」といったキーワードも多く見られ、子どもがいると親も一緒に学べるという視点が多く寄せられた。「地球温暖化についてどう思うか」という設問に対しては、「現状を正しく理解する」「多方面から情報を得る」、「良く知られていない、情報発信が重要」といった意見があり、伝えることの必要性、重要性が参加者の方からも訴えられていると感じた。
委員長	これらのイベントについて、感想を含めて意見や質問をお願いしたい。
委員	アンケート結果には、「子どもの教育に役に立つもの」という意見が予想以上に多い。施設の機能に子ども、教育、体験といったことを入れるのであれば、質の高い議論が続いたので、この一年は、わかりやすさを重視して議論したい。 家族を持っている親の視点や子どもの視点、体験とはどういうものかなど、様々な視点から具体的な意見を出していかないと、意見がまとまらないのではないかと感じた。
委員長	0123 はらっぱでお母さんを対象としたイベントで話をした時に、育児休暇中のお母さんの参加が多かった。勉強したい意欲のあるお母さんたちに、学校でできない教育内容についても、考えていく必要があると思う。 ５月には、具体的なエコプラザの空間の話も議論するので、委員の皆さんのご意見を受けて、具体的なものになっていくと思う。
委員	私たちは、小学校や幼稚園、保育園でも活動しているが、子どもとの対話がほとんどない。先生との会話はあるが、子どもの視点が欠落していると感じた。講演会アンケートの自由意見の中にも、「子ども」という言葉が多く出ていた。子どもたちの視点は、見落としがちだが、自分たちの活動にも、エコプラザとしても、とても大事な視点だと思う。
委員長	環境教育等促進法改正の検討会議で、どのように多世代で共感しながら学び合っていくかを議論した時に、大人が学び直す必要があるという意見が出た。環境教育等促進法は、環境省、文部科学省、国土交通省、経済産業省、農林水産省の５つの省庁から委員が選ばれ、エコプラザで考えている機能に関係する分野がすべて入っており、横断的に検討している。

	また、森、里、川、海の循環の中に日本の生態系があり、地球温暖化の話が、その循環に影響を与えている。新聞で、オーストラリアのサンゴが死滅しているという記事を見たが、地球温暖化の影響で海水が循環せずに温度が上がり、様々な影響をもたらしている。こうした情報・資料を読み解き、自分たちの地域から取り組まなければいけない。
委員	学習会をやっていても、高齢者の参加が多い。今年は杉並区で地球温暖化対策を行っているＮＰＯから声がかかり、杉並区の公立の小中学校の環境授業で地球温暖化について話をした。 環境省が小学生用につくった学習資料を授業で使用したところ、子どもたちの反響が大きかった。３月には、聖徳学園小学校の４年生を対象に、保護者も参加した環境授業を４回ほど実施したが、子どもをターゲットにした内容にすると、親に伝わる部分が非常に少ないと感じた。ターゲットを絞るというより、対象者を分けてアプローチをすることが重要だと実感した。
委員	エコチェックシートの回答状況を見ると、小学生の回答数が多い。無意識に環境に良い行動を行っていると思われるが、中学生・高校生、大学生、20 代になると、回答数が減る。その世代が一番環境から離れるのではないか。特に大学生になると専門分野で学ぶ学生は詳しくなるが、一般的には環境への問題意識は伝わっていない印象がある。施設であれば親子向けの事業などが表に出る傾向にあるが、その世代に手を打てないか。
委員長	全国大学生環境活動コンテストの審査員をして思うのは、大学生３・４年生はゼミで専門的な分野を学ぶが、１・２年生だとまだ思考が抽象的であるということ。全国ユース環境活動発表大会にも関わっているが、高校生のほうが地域の環境課題にしっかりと向き合っている。エコマルシェのような催し物は、専門的な学びに入る前の大学生にもぜひ来ていただきたい。 大学生、高校生が小学生の授業に行くと、小学生から尊敬のまなざしで見られる。それを感じた大学生、高校生が「頑張らなくては」と応える姿を見ると、可能性を感じるが、こうした経験を地域の中でする機会は少ないと思う。
委員	「エコプラザにどんな機能があったら行ってみたいか？」という設問で、「活動する人同士の交流」の回答数がどのアンケートでも意外と多かったのが印象に残った。 「交流の場」として、年代別にターゲットを絞ったワークショップなどを上手く企画できれば良いと思った。
委員	前回の委員発表でもあったように、説明をしても、その瞬間、瞬間では興味を持つが、それを継続させることが難しい。 ３月の講演会で、2050 年の天気予報という動画のコンテンツがあった。講演会には娘と参加したが、家に帰って家族に動画を見せることができた。こうし

	たコンテンツがあると、イベント後も継続的に紹介できる仕掛けになるため面白い。
委員	３月の講演会の地球温暖化の話は、子どもにしてみては怖い話だと思う。自分たちに未来のない、逃げ道のない話に、小さい子であればあるほどその部分が印象に残ってしまう。地球温暖化については諸説あると思うが、科学的な数字を示しながら、希望や目指すゴールを掲げてくれたことは非常に良かった。
委員	アンケートで「エコプラザへの要望や意見」を聞いているが、エコプラザという「施設」ができて、そこで何をしたいかと聞かれた場合、「箱物」をイメージして、子どもに環境教育をしてほしいなど、何かをしてほしいという意見になってしまうと思う。 この会議では、エコプラザのソフト部分、「機能」を議論している。機能について、市民の方に「エコプラザをどのような施設にしてほしいですか」と問いかけても、なかなか伝わらない。市民の方が持つ「箱物」のイメージに納めるのではなく、良い意味で裏切り、市民に寄り添えるものができることを示す必要があると思った。
委員長	エコプラザのように、メタボリズムの原則を共有しながら、市民会議で機能等の具体的な内容を議論して提示する手法は、他の自治体ではあまりないと思う。 クリーンセンターの基本的なコンセプトは「武蔵野の雑木林」で、色まで議論して決めた。しっかりと対話を行いたい。
委員	エコプラザの整備検討の認知度はまだまだ低い。今度のエコマルシェでは、旧クリーンセンター工場棟の解体現場を周るツアーを実施しようと思い始めている。

４　これまでの議論の振り返り

５　エコプラザ（仮称）の機能、空間活用について

発言者	要旨
事務局	資料４は、これまでの議論の中で繰り返し挙げられてきた意見や、委員間で共通理解がされていると思われる事項を事務局でまとめたもの。 「１　施設のコンセプト」「共創による未来に誇れる場づくりとしてのエコプラザ」は、第８回会議でエコプラザ（仮称）のコンセプトについての議論をした際に、皆様からの意見を受けて、コンセプトの大きな括り、キャッチャーとして、委員長がまとめられたもの。 「２　ベースとなる考え方」は、これまでの会議の中で何度も繰り返し意見があったものを挙げている。膨大なごみを焼却し続けた旧クリーンセンターへのリスペクト、新しいクリーンセンターの建設を受け入れ、安全な運転のチェ

	ックを続けていただいている周辺住民の方へのリスペクトなどが議論されてきた。市民参加については、第一期長期計画策定時の精神が今も守り続けられ、新旧クリーンセンター建設も市民参加で進められてきた。本会議でもそれを継承し、エコプラザ（仮称）に市民参加は外せないものとの議論が繰り返されている。メタボリズムは、本会議では重要なキーワードとなっている。最初からすべてを決めないで、人も施設もテーマも変わっていけば良いという柔軟な考え方が繰り返し議論されてきた。生活との接点についても、環境の問題をどう日常生活に結びつけて考えてもらうか、日常生活の接点にどうしたら気づいてもらえるか、議論されてきている。 「３　目指すもの」は、この住宅地にごみの焼却施設があることと向き合うために、「ごみゼロ、ゼロウェイスト」への取り組みを掲げ、市だけでも、企業だけでも、市民やＮＰＯだけでも解決できない、環境という大きな課題を解決するために、それぞれの強みを生かして協力する「コレクティブインパクト」により、ＳＤＧｓに取り組むことの２つを挙げた。 「４　４つの基本方針」については、周辺整備協議会の中間まとめをベースに、第８回会議でいただいた意見を踏まえて、広範な環境をイメージできるよう修正している。 「５　機能について」は、意見交換やフリートーク等で挙げられた意見を環境テーマ別に並べている。それぞれの環境テーマをつなぐ機能や手法と掛け合わせて、新たに具体的な機能を生み出すことも考えられる。周辺整備協議会では、「創造」を機能の一つとして位置づけていたが、今回は、創造をものづくりの視点だけではなく、少し高い位置に据え、ベースとなる考え方や４つの基本方針に移して記載している。 「④今後の機能検討の視点」では、前回の意見交換の中で、「つなぐ」という言葉が重要との意見をいただいた。環境テーマをつなぐ視点、環境テーマと手法等をつなげて考える視点、これから議論する空間と一体で考える視点、こうしたことが検討過程の中で混ざってくると、具体的でわかりやすいものが見えてくると思う。 「６　運営について」は、６月以降、検討を始める予定。これまでに事務局が提出した資料をブラッシュアップした資料や、新たな検討材料となるものを改めて用意したいと考えている。
副委員長	この会議で話題にしてきたことがほぼまとまっている。キーワード１つ１つに物語性があって、どのキーワードでもいろいろなソフトをつくれると思った。 前回の会議がとても印象的だった。武蔵野市のいろいろな事業や、それに参加した方々がいろいろな活動をして成果を出し、自立していることがわかり、外注するのは非常にもったいないと思った。武蔵野市型の管理方法ができるの

	ではないか。エコプラザの運営を支える人材も豊富なため、直営、委託どちらかではなく、武蔵野市のやり方を考えれば良い。 市民のこれまでの活動を、市の事業として予算をとって活動してもらう枠組みつくり、エコプラザのいろいろなキーワードから掘り起こすと人材も集まってくる。コンテンツについては、活動したり展示したり、体験したりする材料は、それぞれが持ち寄ってくる。それを発表する場、活動する場としてこの施設を設定すれば、あまり細かいことを決めなくても良いのではないか。
委員長	先日、けやきコミセンに行ったら、ある方とお会いし、一緒に帰りながら道路沿いの花壇など、周辺を案内していただいた。花壇は、ある企業の社宅の敷地を提供したもので、そこで地域の方が花を育てている。武蔵野市民は誰とでも挨拶ができ、おしゃべりや立ち話ができるため、こうして協力して地域づくりができるのだと思った。
委員	前回話した「さくらマップ」の作成を通して、今年新たに気付いたことがある。市民が行きたい場所は、桜が集中しているところだと思っていたが、いろいろな方からお話を聞いているうちに、市民はさくらマップを見た時に、桜が多いところを目指すだけではなく、実は自分の家の近くの桜がマップに出ているかなど、お花見に行くわけでない、自分の生活圏の特定の桜が好きという意見があることがわかった。桜の多いお花見スポットよりも、宅地の中にある桜や、モクレンやコブシが好きという方がとても多い。 「日本花の会」という団体で桜の木を配布しているので、武蔵野市で公共の緑にお金をかけられないのであれば、個人宅で緑を植えられる人が植えれば良い。その植える木を配布したり、何か補助をしたりすれば良いのではないか。 以前、苗木を配った後の感想を調査したことがあり、庭のある大きなお宅では、市から木をもらってすごく喜んでいた。そうしたお宅であれば木を１本買うこともできると思うが、市からもらったことがとても嬉しかったと話していた。市とのつながりがあったり、庭で育てた木をまち行く人が見て嬉しいと思うことを自覚できたりすれば、「民」の力だけでもう少し緑が増えると感じた。個人宅など、桜が点々とある場所をもう少し充実させて、まちの中に季節を感じる緑があると良いと思った。維持が大変だが、まちの人が褒めてくれて嬉しいという気持ちがモチベーションになるような、良い循環が持てれば良い。
委員長	桜の寿命を理解して、植え替えて更新していくように、エコプラザがまち全体を更新する語りの場でもあってほしい。
委員	クリーンセンターに子どもを見学に行かせておけば、エコプラザはいらないという意見もある。武蔵野市役所に用がなければ、ここには来ないことを踏まえて、武蔵境や吉祥寺南町の方がわざわざ来るためには、充実した機能を用意し、イベントを実施する必要がある。

	武蔵野市には、いろいろな分野に人材がいて、出前講座や、環境の話をする機会を設けてくれる人たちがいる。そのような人材・素材を蓄積して、誰かがその蓄積からネタを探すような、学校の先生の良いネタ探しをサポートするような施設であれば良い。環境について教えることができる人たちと、教えてほしい人たちが出会えるようなイベントを実施したり、施設に誰もが自由に入れて、なんとなく環境を楽しいと思えて、いろいろなものを体験できるような機能の話がもう少し深まっていくと、この施設ならではのことができる。
委員長	いつも市民公園で集まっているお母さんたちを見ると、すごく能力の高い方たちだろうなと思って見ている。お子さんたちは遊んでいるが、お母さんたちは、ブルーシートに集まって議論を楽しんでいる。そうした若い力を活用しながら、お互いに学び合い・分かち合える場という機能がエコプラザに込められていると思った。 また、エコプラザは教訓を生かす場づくりでもある。副委員長の昭和記念公園での取り組みにもあったように、記憶をどう残していくか、どう再現するかが重要になると思う。
副委員長	昭和記念公園で提案して最後まで実現しなかったことは、企画や運営、それぞれのイベント等の実績のアーカイブ化である。例えば、エコマルシェであれば、どういう趣旨で、誰を対象にして、どういう人が担当で、使ったメディアやフォーマット、結果等をすべて集めておく。関わった人の連絡先など、ノートを１冊つくってまとめると良い。 エコプラザでの活動が貯まっていくと、例えばごみ問題啓発の企画をしたい時に、過去の記録を振り返って、どういう人が関わっていたかがわかる。行政は人が替わったり、いろいろなつながりが途中で切れてしまい、またやり直さなければならなくなる。記録をしっかりつけておくと、外部に委託した時も、記録に残すように指示ができ、貯まった時に財産になる。
委員長	前回会議で発言したポートフォリオは、「個人の変容」を質的に総合的に評価するもので、人数などの数の評価だけではなく、個人が変容して、それが行動につながるという意味で使った。ポートフォリオは学習過程で生徒が作成した様々なものを保管するものを指すが、記録をつけておけば、誰でも検索してアイディアを得ることができる。記憶と記録を次の新しい企画につなげることができる。
委員	エコプラザがどのような施設かを考えると、「全市民のための施設」というのが一番の前提になる。特定の活動をする人たちのためだけの施設ではない。全市民に向けて何を提供する施設かを考えると、資料４の２④「生活との接点」がとても重要だと思う。 エコプラザで行うことが、市民生活に寄り添ったものであることが重要だ。

	環境に関心がない人たちに何か伝える時に、市民生活に寄り添った形で伝えたり、何かをしたりする視点が大事で、それが浸透していけば、全市民に必要とされる施設になると思う。特定の分野のためだけの施設ではなく、全市民の方が何らかの利益を得られる施設にしたい。特に地球環境を含めて考えた場合には、全市民どころか、全人類に関係することなので、その視点を忘れずにこれから議論したい。 　このまとめの中でまだ見えていないのは、市民がどうこの施設を利用するかだと思う。ここではエコプラザが何をするか「機能」の整理を今メインでしていると思うが、市民側からすると、エコプラザができた時に、例えば赤ちゃんを連れていけるのか、土日も開館しているのかが気になる。そうした「利用」面も想定して深めていくと、「エコプラザで何をしていくのか」が整理されて明確になると思う。 　５月は空間について検討するので、それは「利用」とも関わってくるため、そのことを含めて深い議論ができればと思う。
委員長	資料４「６　運営について」は、あまり今日は詳しく議論ができていない。そこは先ほど次回に模型を見ながらという話も出ていたので、空間を見て議論ができればと思う。 　私も委託を前提に議論していたように思う。改めて議論していきたい。
委員	ここで何をするか、あるいは市民がどう利用できるかを整理した上で、それを上手く利用するにはどのような運営方針が必要かという順番で議論することが重要である。
副委員長	そう考えた時に、「全市民」は非常に抽象的な概念になってしまう。具体的にいうと、家族形態やライフスタイルがそれぞれ異なり、ある程度想定して、例えば母子家庭、三世代同居の家族、高齢者のみ等いろいろなシナリオをつくらないと、誰でも来られるけど誰も来ない施設になると思う。
委員	以前実施したワークショップで、カードを配って、70 歳男性で足が少し悪いなど、それぞれ別の人格になり、足が悪い高齢者の気持ちになると、どのようなことをしてほしいかを考えた。副委員長の意見のように、ある程度パターンを考えて、エコプラザにこういうパターンのこの人が来た時には、ここをこういう風に使った方が良い、こうすれば行きやすいのではないかと考えるのはとても良い。ひとくくりに市民としてしまうと、対象がわからなくなるので、次回グループに分かれて話をする際には、ターゲットの想定を変えながらどんな設備がほしいか、検討すると良いのではないか。
委員長	次回は、委員の皆さんが各世代になって、多様な物語をつくり出すようなグループワークができると良い。
委員	もう少し具体的に検討しても良いかもしれない。例えば、クリーンセンター

	の隣りの野球場に試合に来た少年野球チームの子どもたちが、試合を待っている間にエコプラザの前の広場で弁当を食べている。そこに夕立が来て、エコプラザへ逃げ込んだら、そこで弁当を食べて良いか。弁当を食べた後、しばらく雨が止まないので、展示を見ながら遊んでも良いかなど、いろいろ考えられる。
委員	環境について積極的に取り組まれている団体の方の施設とするのか、まちの利用者を主体とする施設にするのかという２つの意見が出たと思う。例えば、食品スーパーはどちらかというと消費者向けの施設だが、道の駅や直売所は、近隣の生産者がつくった野菜を手軽に販売できる立ち位置の施設である。機能はスーパーと直売所とでは違うが、副委員長は、どちらかというと直売所的なモデルの方が武蔵野市らしい運営ができるということか。
副委員長	そこまで選別したものではなく、そうした要素を入れてまとめたほうが良い。道の駅でも消費者側のことを考えているが、生産者がいないと、そもそも消費者もいなくなる。生産者側に立つか消費者側に立つかというより、どちらの立場からも見ていないといけない。消費者のことを考えずに生産者のことばかり考えると、「つくれば売れる」ので工夫もしなくなり、「次に加工する」ことも考えない。消費者も安ければ良いと物を買ってしまう。 両方の視点が必要である。活動する人向けに特化した施設にしようとするつもりはないが、活動する人もその活動を受け止めて理解してくれる人がいないと続けられない。理解しようと思っても、活動がなければ何もできない。つくる人が学ぶ人でもあり、学ぶ人がまたつくる人になるかもしれない。それぞれの交流を活発にする１つの基盤として、エコプラザが機能できるのではないか。
委員長	先ほど、資料４の「３　目指すもの」のコレクティブインパクトの成功例としてＳＤＧｓが記載されているが、これは「つながる」という概念に結びつくものである。いろいろな立場で物語を見出した時に、この商品が途上国でどのように生産されているかをイメージできるか、武蔵野市の農家が生産していることだけをイメージするかで、展開の仕方が全く変わってくる。 目指すべき賢い生き方がＳＤＧｓの中にあり、商品を通じて世界を見ることができる。
委員	自身の活動団体で様々な現場を持っているが、なかなか人が集まらない。救いの手をエコプラザに求め、エコプラザで活動をＰＲして、人を集めたいと思っている。ＰＲは今までも行ってきたが、なかなか功を奏していない。子どもを通じてお父さん、お母さんと接する機会があるが、若いお父さんとお母さんは私たちにとっては宝の山。実際は普段仕事を持っていて、週末の限られた時にしか来られないため、持続可能性が低い。 プロダクトアウトで考えるのではなくて、市民の中のマーケットを見ながら、自分たちの中に引き入れる発想に変えていかなければいけないと思った。

	これからは多世代交流が重要で、エコプラザがそうした場になるのかとおぼろげながら感じた。
委員長	本来の環境のことを考えると、暗黙知や生活で積み上げてきた伝統知のようなものもとても大切。そこが今後、世代間交流をどう生み出すかに関わることだと思う。そのためにポートフォリオ的なアーカイブも重要になる。
委員	今月に入って３人から生ごみの処理方法を教えてほしいと相談された。我が家でやっている手法は教えたが、手に負えない時には、専門に活動されている方にお願いしようと思っていた。自分の活動の中でも、その後もう一歩踏み出す時に、協力できる方にお願いしたいことはたくさんある。こうした宝の山はけっこう転がっている。
委員長	水の学校でも修了生がＯＢとして関わって、地域の人を巻き込んでいる。
委員	新しいことにつながるというキーワードを踏まえると、野球少年が偶然雨に見舞われて、エコプラザの中でご飯を食べるという話があったが、そこで雨水の話をして、雨水はこうして利用できるため、捨ててはもったいないと、子どもたちが思ってくれたらラッキーだと思う。何気ないことがつながっていく施設になれば良いと思う。
委員	１つ目は、資料４の３②「コレクティブインパクトの成功例としてＳＤＧｓに取り組む」の最後に、※印で環境課題に関係の深いものが４つ示されているが、目指すものがどれなのか曖昧な気がする。この４つがテーマの課題として、それに関わる環境問題を解決することが目指すものなのか、それともコレクティブというスタイルを、成功事例としてつくることが目指すべきものなのか。 ２つ目は、武蔵野らしい話として、まちですれ違う人と話ができて、その人がプライベートとパブリックの線を引いていない、曖昧なところがあって、それが非常に良い空間になっているという話があったが、それが魅力となり、「住みたい街ランキング」にも影響しているのではないかと思った。エコプラザもしっかりと設計せずに、余白がある方が武蔵野市らしいと思うし、市民の力を発揮できるのではないか。 ３つ目は、エコプラザの機能の目的は、テーマによって異なると思う。エコプラザで実現する啓発機能で完結することはあるかもしれないが、ごみ問題は、ごみの処理方法等について出前講座を行った方が効果的かもしれない。地球温暖化対策のように、啓発は非常に大事だが、啓発だけではなく行政の誘導や規制等もある。地球温暖化対策の中で、最初の普及啓発の部分はエコプラザで担った方が良いと思う。横断的に啓発業務を詰め込むのではなく、それぞれの活動で実現したいと思っていることの中で、エコプラザで行う方が良いことを機能として集めれば良い。 この先、空間を設計する時も、コミュニティセンターごとでは難しい取り組

	みもあるので、エコプラザでしかできないことを整理して議論できれば良いと思う。
委員長	コレクティブインパクトの成功例が目指すものとして、委員はどちらをお考えか。
委員	コレクティブインパクトは手法であって、達成目標そのものではない。環境啓発で意識が変わることを目指せれば良いと思う。ごみに関しては、クリーンセンターの生い立ちや経緯があるので、リスペクトすべき部分がある。
委員長	ＳＤＧｓの 17 の項目に優先順位がある訳ではない。とりあえずは、環境に関わる４つの目標の「つながり」を考えではどうかということ。小学校でビニールシートを敷いて子どもたちに太陽光に当たらせて、そのエネルギーを体で感じてもらった。次に、ペットボトルに白いテープと黒いテープを巻いて白熱灯を当てた。どちらの温度が上がるか実験してもらい、それによって子どもが理解する。それを地球に置き換えると、いろいろな発想が生まれてくる。こうした教材の提供も議論できれば良い。新しい発想を持ってもらうためには、どのような空間をつくるかがポイントだと感じている。空間づくりは、管理の仕方とも関わってくるので、今後議論していきたい。
委員	最終的に私たちの責任として、この会議の議論をいかにわかりやすく、市民に伝えていくかが大事である。わかりやすく概要版を示し、その上で反対する人が出ても仕方がない。これから噛み砕いて、コンセプトを崩さずに、わかりやすく説明することが一番大変だと思う。削るのではなく、上手く伝えていくことにだんだんとシフトしていく必要があると思った。 先ほど模型を作成しているとの話があったが、具体的にどのような模型か。
委員	周辺整備協議会では、クリーンセンターの敷地全体をどう考えていくかをずっと議論してきた。既に外部の模型はあり、エコプラザの内部の模型を試験的につくっている。それを見ていただければ、具体的な空間のイメージが湧くと思う。今日議論いただいたいろいろな機能と空間をどうすり合わせができるか、イメージしやすいものを出したい。
委員	模型があるということは、用途などが決まっているのか。
委員	周辺整備協議会での８年間の議論の中でいろいろな模型をつくってきたが、エコプラザの内容についてはなかなか議論ができなかったため、この会議に議論の場を移している。以前、他の委員からもエコプラザの内部の模型がほしいという話があったため、これまでにつくったものを参考に持ってきたい。既に用途が決まっている訳ではなく、エコプラザの空間活用を考えるにあたり、イメージしやすくするためのもの。
委員長	９月にパブリックコメントがあるので、この会議のまとめについては、ぜひ小学生に説明するような、わかりやすい文章かどうかをチェックしていただき

	たい。お互いに持っている力を生かし合って、こうした会議は成り立っている。よろしくお願いしたい。
委員	これまでの10回分の議論をまとめたこの資料４は、確定したものではなく、次の議論のスタートとして提示したもの。これからの議論の中で、内容を変えたり、入れ替えた方が良いところも出てくると思う。 また、市民への周知に関しては、新クリーンセンターについては大分周知がされており、昨年度はイベントなどで23,000人が来場した。これからはこのようなイベントで、エコプラザについて周知するとともに、この会議でいかにわかりやすくエコプラザがどのような施設になるかを説明していくことが重要だと思う。これから駆け足になるが、しっかり議論をして、市民の皆さんにわかりやすく説明ができるようにしたい。
委員	今後のスケジュールを見ると、機能と空間の話が次回あり、その後は運営についての議論とある。先ほど話にあったグループワークには、委員のほかに事務局からも入るのか。
事務局	委員のみで考えていた。事務局は記録の作成があるため、各テーブルに入って議論の状況を聞き取りたい。
委員	自治体の会議に良くあることだが、事務局が所属する課のみで全部が把握できているのか疑問に思う。例えば、市民活動の団体やＮＰＯに何か依頼する場合に、市民活動推進課や生活経済課などの関連部署が他にある。意見やノウハウを持っている部署の職員が多くいる中で、環境政策課以外の部署が回答した方が、内容がより良くなる場合もあると思う。他市の事例で、ある部署の方が強引に意見を持っていこうとして、委員の意見が両極端に分かれてしまった。原因は単純で、それに関わる部署が誰も出席しておらず、事務局が把握していないことがあった。このようなグループワークでは多様な意見も出るため、関連部署と連携した方が良いと思った。
委員長	クリーンセンター建設時のように、武蔵野市は必ず庁内に会議体をつくっている。情報共有できる仕組みがあるという前提で、今日の議論を行っている。
委員	それがあれば良い。自治体によってはその仕組みがない。
事務局	環境部内に環境啓発のことを考えるワーキングチームをつくり、平成27年度に、子どもの分野や教育分野、ＮＰＯ・事業者とも関連が深い生活経済課とヒアリングを行い、エコプラザが出来た時にできる連携や課題等について意見交換を行っている。また、新クリーンセンター建設時には、情報共有を目的に部長級で会議を行っていたが、今後は、課長級で情報共有や内容を検討する会議体を設置する予定。その後、秋以降に事業担当者レベルで意見交換ができる体制を構想している。

６　その他

発言者	要旨
事務局	５月からエコプラザの検討状況についてお知らせするニュースレターを発行したいと考えている。市民会議の検討状況をベースとして、３月の講演会等もトピックスとして盛り込み、月１回程度発行したいと考えている。要録の確認とともに、ニュースレターの内容も確認をお願いしたい。 ６月以降の会議の日程調整については、近日中にメールで連絡したい。 クリーンセンターで６月にエコマルシェが開催される。エコプラザの担当として、周知を目的に出店する。当日の企画内容や、お手伝いなど、ご意見、ご協力をいただけるとありがたい。 また、市としての考え方等をまとめるにあたり、６月に環境市民団体の皆様にアンケートを実施したいと考えている。アンケートの内容等について、ご意見があれば、事務局に寄せていただきたい。
委員	環境市民団体へのアンケートの一番の目的を確認したい。
事務局	環境啓発施設開設準備担当を設置して以降、市内で活躍されている環境市民団体の皆様に、直接エコプラザ（仮称）について意見を伺う機会を設けてこなかった。市の考え方をまとめるにあたり、環境市民団体の皆様がエコプラザ（仮称）をどう考え、どのようなものが求められているのかなど、聞いておくべきと考えた。
委員長	アンケートの送付先の団体についても要望があると思う。ぜひ意見をもらいたい。
委員	机上配布したチラシの「廃材コレクション展」とエコマルシェは、クリーンセンターを運営する事業者と市が共同で開催しているイベント。エコマルシェは年に３回あり、今年度１回目は、６月 10 日に開催する。またブース出店について委員の皆様にもご協力いただければありがたい。 先ほど委員から、若いお父さん、お母さんがなかなか集まりにくい、参加していただけないという話があったが、クリーンセンターのイベントでは、「おもちゃのかえっこ」や「子ども向けのワークショップ」などいろいろと実施し、お子さん連れのご家族や、子どもだけの参加も多い。 クリーンセンターの立地では、ふらっとは誰も来ない。ここで必要なことは、必ずＰＲや宣伝をして、興味を持たせること。興味を持ってくれると、１回のエコマルシェで 1,000 人ほど来場する。こうした中で、エコプラザで何ができるか、必要なことは何か、今後エコプラザの議論を深めていきたい。
委員	最近またクリーンセンターで火事があった。エコマルシェは楽しいイベントで良いが、不特定多数の来場者がいるので、爆発、火事の原因となった残骸等を見せた方が良いのではないか。近隣地域には、不安に思っている方も多いと

	思うので、ＰＲを徹底したい。
委員	結果的には火災扱いではなかったが、消防車を呼んで一定の消火活動も行った。クリーンセンターは見学も自由にできる施設と言っても、工場である。しっかりした運営管理が重要である。自由に見学ができて、イベントなど、いろいろなことができることも大事だが、「安全稼働」が一番である。そのことは、市民の方にも知ってもらう必要がある。 特に火事の主たる原因とみられるのがリチウムイオン電池で、山手線での発火などの例もあり、傷ができると燃えやすい性質がある。これだけが原因とは限らないが、火災が頻繁に発生し、近隣の方に迷惑をかけている。ごみも多様な製品開発で処理が難しくなっているが、市民の方々にも分別にご協力いただき、行政がしっかり管理をしていく必要がある。委員のご意見の通り、周知を徹底したい。
委員	火事がすごかったという話が噂として広まっている。火災扱いではないという事実が伝わっていないため、周知する必要がある。
委員長	エコマルシェで火事の現状・原因を含めて周知できれば良い。